

# 李濟民名誉教授記念号及び 瀬戸篤名誉教授記念号の刊行にあたって

学長 穴 沢 眞

この度、李濟民名誉教授記念号及び瀬戸篤名誉教授記念号が刊行されるにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

李濟民名誉教授は1981年に延世大学商経学部経営学科をご卒業され、その後、1985年に小樽商科大学大学院商学研究科博士前期課程を、1988年に延世大学大学院経営学科を修了されました。韓国において韓国開発研究院にお勤めになり、その後韓国全州大学において教鞭をとられました。1989年に本学商学部商学科の講師として赴任され、その後、1990年には助教授、1997年には教授に昇任されました。また、2004年に本学大学院アントレプレナー専攻（ビジネススクール）が設置され、李先生も2006年から大学院商学研究科教授となられ、2020年に退職された後も2022年3月まで特任教授として教鞭をとられました。その間、2006年4月から2010年3月まで専攻長の重責を担われ、2011年4月から2016年3月までは本学ビジネス創造センター長、2016年のグローバル戦略推進センター（CGS）発足後は産学官連携推進部門長を歴任され、本学の産学官連携、社会貢献の分野において多大な功績を残されました。

李先生のご専門は国際経営学であり、赴任時から商学科において国際経営論をご担当され、専門職大学院に移られてからも学部において引き続き国際経営論を担当されました。また、地域学のコーディネーターとして産業界、自治体などから多数のゲストスピーカーをお招きして学生が早い段階から実社会の先達の教訓に触れる機会を作られました。ビジネススクールではご専門の国際経営のみならず、経営戦略や地域医療マネジメントなど幅広く学生の教育、指導

にあたられました。研究面では国際経営関連の多くの論文を著されるだけでなく、北海道企業や北海道経済の動向についてビジネス創造センターやCGSでのプロジェクトを通じて多面的に分析をされてこられ、多くの実践的な報告書をまとめられました。道内外さらには海外との幅広い人的ネットワークを構築され、本学の国際化や産業界との連携において中心的な役割を果たされました。

瀬戸篤名誉教授は1983年に小樽商科大学商学部経済学科をご卒業され、同年北海道電力株式会社に入社されました。1988年から1990年に国際大学とニューヨーク大学の修士課程に同社から派遣され、1990年から1995年まで同社総合研究所研究員としてお勤めになる傍ら、1993年から北海道大学大学院農学研究科博士後期課程にて農業経済学を専攻され、1996年に博士（農学）の学位を取得されました。1995年に本学商学部経済学科の助教授として赴任され、1999年4月のビジネス創造センターの開設に伴い、発足時から2005年3月まで副センター長も兼任されました。2002年から2004年にかけて名古屋大学MBAコースの併任教員となるほか経産省、文科省の委員も歴任されました。2005年には本学ビジネススクールの教授に昇任され、長きにわたりビジネススクールでの教育に携わってこられました。

瀬戸先生は経済学科において経済データ解析論をご担当され、多くの優秀な卒業生を輩出されました。その後、ビジネススクールに移られてからはベンチャー企業、アントレプレナーの系譜とリーダーシップ、テクノロジービジネス創造、ベンチャー経営などの科目を担当され、多くの学生に慕われ、特に起業された教え子の方々からは絶大なる信頼を得ていらっしゃいました。また、ビジネススクールでの経験をもとに『MBAのための企業家精神講義』（同文館）などのテキストも出版され、我が国におけるビジネススクールでの教育に大きな足跡を残されました。

研究面においても大学院でのご専門をもとに北海道の農業、産業連関表を用いた酪農乳製品の国際比較、農業農政の経済分析などの多くの論文を著されています。後年はベンチャー企業、アントレプレナーシップ、イノベーションに

関する数多くの論文と著書を出版されました。特にイノベーション関連の著作は大変啓蒙的で示唆に富んだ内容であり、私も深い感銘を受けました。

お二人は早くから大学院における社会人を対象とした課題解決型の授業を担当され、さらに地域経済社会システム研究会において現場に直結する研究を進めて来られました。社会人向けの大学院はその後ビジネススクールの設置へと進み、地域経済社会システム研究会はその後、ビジネス創造センター創設へとつながりました。

李先生、瀬戸先生ともにビジネススクールの草創期からの中心メンバーであり、ビジネススクールの発展にご尽力されました。本学のビジネススクールは東京以北では唯一のものであり、これまで多くの有為な人材をビジネス界に送り出し、道内経済において確固たる地位を築きました。今年、20年目を迎えるビジネススクールの隆盛の礎を築かれたお二人に心からの感謝の意を表したいと思います。お二人の先生は残念ながら教授としては本学を退任されましたが、産学官連携、ベンチャー企業育成の面で引き続き名誉教授として本学へのご支援を頂いております。